第５章　ドゥオンラム村の集落構造

１　集落の基本構成

ドゥオンラム村には、集落の歴史を知りうる文献、絵図類が残っていないため、集落の歴史と構造は、現在の集落形態や住民への聞き取りにより分析し、演繹することで理解する必要がある。

集落構造理解のための方法として、今回の調査では以下のような分析方法を試みた。

①集落の旧規模の把握

②街路パターン、敷地割、公共建造物の配置による集落構造の把握

③同族集団の居住範囲からの集落形成過程の推定

④近隣集落との比較

この分析の手順に従い、ドゥオンラム村の構造を解読していこう。

旧ミア村４集落の構成　旧ミア村を構成する、モンフー、カムティン、ドンサン、ドアイザップの４集落は、現在は相互に連続しており、一体の大規模な集住地の様相をなしている。しかし、これは20世紀後半における各集落のスプロールの結果であり、元来は４集落が相互に距離をおいて独立していた。すなわち、各集落の構造は、それぞれに別個のものとして理解される必要がある。

各集落外周付近に建つ住宅は、ほとんどが20世紀後半以降の開発によって新規に建築されたものである。以前は畑および池で、建物としては耐久性が低い竹家に限られていた。

各集落は、外周を池ないし竹林で囲む、いわば環濠集落の様相をなす。池及び竹林には開口を設け、門を設置する。モンフーでは、５つの門を設け、外部から完全に遮蔽されていた。東門のみ、当初の位置に建造物が残されている。

集落は、水田地帯が広がる中の微高地を選んで立地される。高低差を利用して外周に池を設け、池の

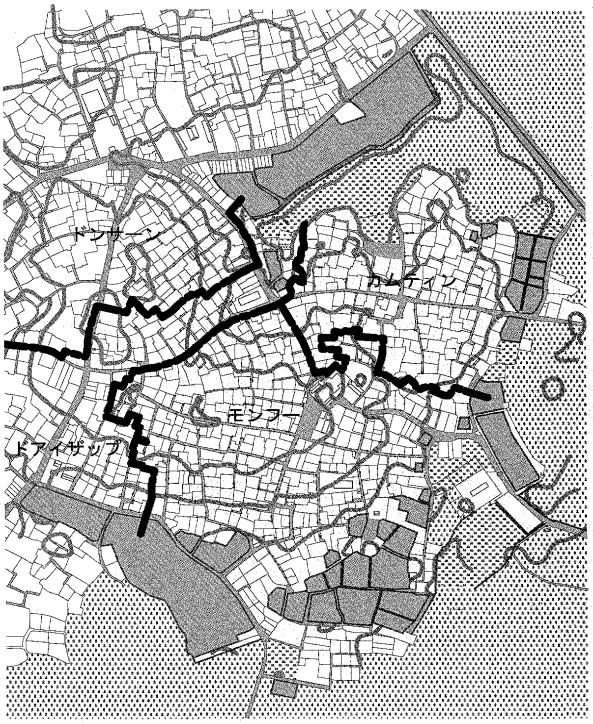

図５－１　旧ミア村４集落の構成と地形

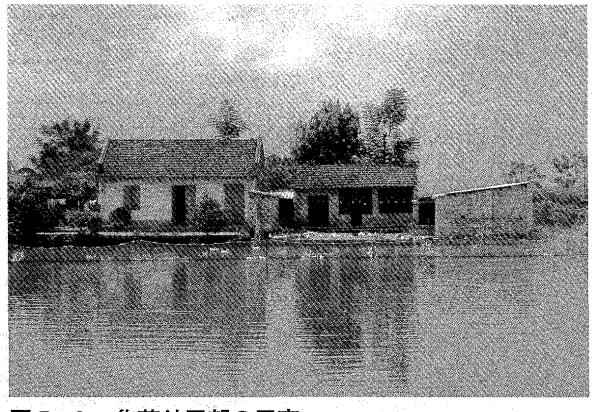

図５－２　集落外周部の民家

図５－３　モンフー集落東の門

内側には竹藪を配する。各集落間は、集落内の主要街路を延長した道路で繋ぐ。

主要街路は地形を読み込み、等高線に沿って置かれるか、あるいは尾根筋を通す。

4集落それぞれにディンを持ち、集落の核とする。寺院としては、ドンサン集落にミア寺が所在し、隣接して市場が開かれ、4集落で共同利用する。

この他、カムラム集落出身の英雄、フンフンとゴクエンを祀る廟が、カムラム集落の南西に位置する微高地に設けられる。

集落内の構成　モンフー集落を例に、集落内の基本構成を述べる。集落内には、同姓からなる氏族が複数住まい、同族集団を形成している。これら各族の宅地には一定のまとまりがみられる。そのまとまりの集落内における位置関係は、各族の集落への移住の順序と対応し、集落の開発過程を示しているものとみられる。

主要街路は、ディン前広場の南を東西に走る道路で、集落が所在する微高地の尾根に沿って設けられる。この道路周囲に、ドゥオンラム村への移住が古いとされる族の住居が多く見られる傾向がある。

集落は5つのソム（Xom：部落）からなり、それぞれのソムにディエム、共同井戸が1つずつ設けられる。

集落の核は、ディンとその前面の広場である。ディンの位置は、集落の中心部ではなく、北縁部に位置する。これは後述するように、元来はディンの位置が集落の中央であったが、その後ディンから南方向へ開発が延びたため、このような位置関係となったものと推察される。なお、カムティン、ドンサン両集落では、ディンは集落の中心部に所在する。

街路パターンは、概ねグリッド状を呈する。しかし、各街路は微妙にうねり、かつ道路幅も狭いため、体感上は方向性、ヒエラルキーを感じにくい迷路状の街路配置に受け取られる。

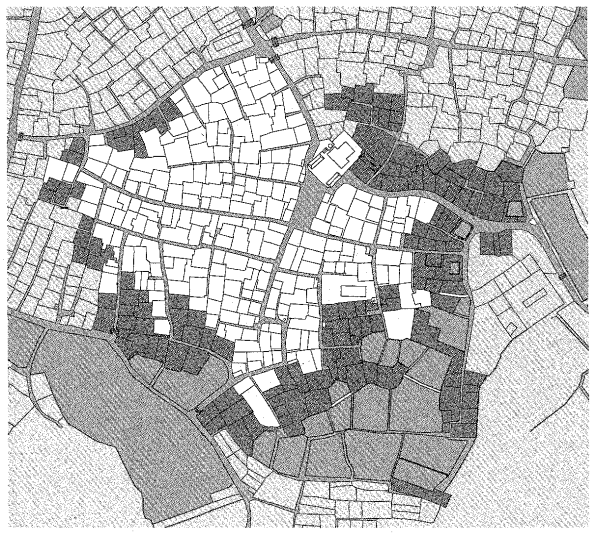

図5-4　20世紀前半におけるモンフー集落の規模

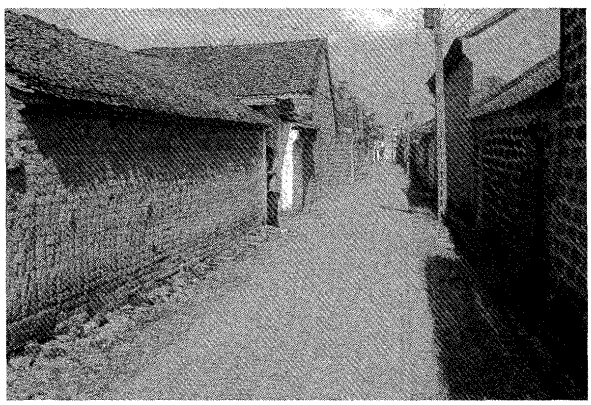

図5-5　モンフー集落を東西に抜ける道路

図5-6　モンフー集落内のディエム